

マードル氏とメルモット氏 Mr. Merdle and Mr. Melmotte

齋藤 九一
Kuichi SAITO

1 『リトル・ドリット』と『我々の現在の生き方』

トロロブ (Anthony Trollope, 1815-82) はディケンズよりわずか3歳若いだけだが、彼の出世作となった第4作目の『院長』(*The Warden*, 1855)の出版は、例えばディケンズの『ピックウィック・ペーパーズ』(1836-37)に遅れること約20年であった。これはほとんど別世代と言ってもよいほどの差であり、その点でトロロブをディケンズの後輩作家とみなすことは許されるだろう。「後輩作家」トロロブがかなり頻繁にディケンズの作品や人柄に言及していたことについては、口頭発表(ディケンズ・フェロウシップ日本支部シンポジウム「後輩作家から見たディケンズ」, 1999)や、論文「トロロブから見たディケンズ」(『上越教育大学研究紀要』第19巻第2号, 2000)でいくらか明らかにした。ここでは、ディケンズの『リトル・ドリット』(1855-57)の登場人物マードル氏と、トロロブの『我々の現在の生き方』(*The Way We Live Now*, 1874-75)の登場人物メルモット氏 (Mr. Melmotte) の描かれ方を比較することによって、この二人の作家の関係をめぐる考察をさらに一歩進めたいと考える。

『リトル・ドリット』とトロロブの関わりは決して浅くない。それというのも、ディケンズが『リトル・ドリット』でお役所仕事を揶揄した Circumlocution Office にトロロブは大いに反発したらしく、同時期の自作『三人の公務員』(*The Three Clerks*, 1858)ばかりでなく、約20年後、ディケンズ死後9年経った頃になってもなお、『ジョン・コールディゲイト』(*John Caldigate*, 1879)の中で、Circumlocution Office を引き合いに出しているからである。

It is generally admitted that the Weights and Measures is a well-conducted public office [. . .]. It is exactly antipodistic of the Circumlocution Office, and as such is always referred to in the House of Commons by the

gentleman representing the Government when any attack on the Civil Service, generally, is being made. (The Three Clerks 1-2)

The popular newspaper, the popular member of Parliament, and the popular novelist — the name of Charles Dickens will of course present itself to the reader who remembers the Circumlocution Office — have had it impressed on their several minds — and have endeavoured to impress the same idea on the minds of the public generally — that the normal Government clerk is quite indifferent to his work. No greater mistake was ever made, or one showing less observation of human nature.

(John Caldigate 365)

すなわち、自身が郵政省の職員で、役所というものの内情をよく知っていたトロロプとしては、『リトル・ドリット』におけるディケンズの十把一絡げのお役所批判には大きな抵抗を感じていたものと思われる。

さて、トロロプの『我々の現在の生き方』は、彼の数多い小説作品の中でも最も長い部類に属する大作であるだけでなく、内容的にも当代の社会への辛辣な批判をパノラマ的に展開するものである。したがって、ディケンズの後期の大作のいずれとも比較可能と言ってよいが、ここで敢えて『リトル・ドリット』と比較するのは、上述のように「役人」トロロプが『リトル・ドリット』にこだわり続けたことを考慮したためでもあるが、それ以上に、これらの作品に登場するマードル氏とメルモット氏の人物造形の比較に関心を持っているためである。

もちろん、この2人の作中人物の類似性に言及する人はこれまでも少なくなかったが、詳しい比較にまで至らないのが通例である。例えばフランク・カーモード(Frank Kermod)は、ペンギン・クラシックス版『我々の現在の生き方』の序文の中で、“Merdle, in Dickens’s *Little Dorrit* (1855-7), is an earlier fictional rendering of a grand speculator; Trollope had read that novel” (xii) と言っている。しかしカーモードは、メルモット氏の“various real life models”を論じるのみで、この“grand speculator”の二つの肖像を詳しく比較しない。まさにそのことを我々はここでいくらか試みたいと思うのである。

マードル氏もメルモット氏も、いわゆる詐欺師であるが、悪人の描き方についてトロロプが興味深いことを言っている。『三人の公務員』において、悪人のタイプを論じながら、トロロプは、ディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』のビル・サイクスを引き合いに出す。

[...] but with Bill Sykes we may contrast [Undy Scott] as they flourished in the same era, and had their points of similitude, as well as their points of difference. (529)

[...] Is it not the fact, that, knowing him as you do, you could spend a pleasant hour enough with Mr. Scott, sitting next to him at dinner; whereas your blood would creep within you, your hair would stand on end,

your voice would stick in your throat, if you were suddenly told that Bill Sykes was in your presence? (530)

ディケンズのビル・サイクスのような、境遇も外見も絵に描いたような悪人に対して、トロロプのこの小説に登場するアンディ・スコット(Undy Scott)は、貴族の子弟で国会議員でもありながら、地位を利用した悪事を行う人物である。ビル・サイクス的な一目でそれと知れる悪漢ではなくて、紳士として淑女と同席しうる社会的地位を持ち、それゆえに一層極悪な悪人を描いたという点にトロロプの自負が感じられる。

しかし、言うまでもなく、『リトル・ドリット』のマードル氏は、『オリヴァー・トゥイスト』のビル・サイクスとは異なるタイプの悪人像である。まさに紳士・淑女の中に立ち交わって違和感のない悪漢であることは、彼が何よりも大文字の Society への奉仕者をもって自任していた (“[...] who does more for Society than I do?”) ことで明らかである (*Little Dorrit* 384)。また、トロロプのメルモット氏も同じタイプの悪漢であることは、彼が、英国訪問中の中国皇帝歓迎パーティのホスト役を務め、貴顕紳士を応接する一事で明らかである (*The Way* 269-271, 450-57)。したがって、トロロプのようにビル・サイクスとアンディ・スコットを比較するよりも、マードル氏とメルモット氏を比較する方が、はるかに公平だと言える。

2 噂と謎

マードル氏やメルモット氏のような巨大な投資にからむ詐欺師には、何か謎めいたところがあると考えるのが常識だろう。しかし、例えば、トロロプのメルモット氏は、ロンドンに登場した直後から、すでに詐欺師という噂は広まっていた。したがって彼が安易に信用できない危険な人物であることは、読者ばかりでなく作中人物たちにとっても、一貫して、秘密でも謎でもない。

It was at any rate an established fact that Mr. Melmotte had made his wealth in France. He no doubt had had enormous dealings in other countries, as to which stories were told which must surely have been exaggerated. [...] but it was also said that he was regarded in Paris as the most gigantic swindler that had ever lived; that he had made that City too hot to hold him; that he had endeavoured to establish himself in Vienna, but had been warned away by the police; and that he had at length found that British freedom would alone allow him to enjoy, without persecution, the fruits of his industry. (*The Way* 31)

『我々の現在の生き方』の登場人物の1人で、金銭万能の時流に対して毅然とした態度をとり続ける人物ロジャー・カーベリー(Roger Carbury)も “I have heard of

the great French swindler who has come over here, and who is buying his way into society” (60) と酷評している。しかし、「社会」はそれと知りつつメルモット氏を受け入れる。

Mr. Melmotte was admitted into society, because of some enormous power which was supposed to lie in his hands; but even by those who thus admitted him he was regarded as a thief and a scoundrel. (247)

小説の後半でメルモット氏はウェストminster選挙区から保守党の候補者として立候補し、様々な悪い噂にもかかわらず当選するが、語り手は噂を容赦なく裏書きしてみせる。すなわち、語り手は、“Of course he had committed forgery—of course he had committed robbery. That, indeed, was nothing, for he had been cheating and forging and stealing all his life” (495) と言い、あまつさえ、メルモット氏が他人の署名を偽造した手順を詳しく、しかも2件も、読者に紹介するという徹底ぶりである (Ch.73 and Ch. 77)。

一方、ディケンズのマードル氏はどうであろうか。マードル氏は、小説の他の登場人物たちの視点から見る限り、悪い噂はなく、信頼に値する人物とみなされている。ただし、「マードル氏の不調」(Mr. Merdle's complaint) と呼ばれる抑鬱状態を除けばである。

Mr. Merdle's complaint. Society and he had so much to do with one another in all things else, that it is hard to imagine his complaint, if he had one, being solely his own affair. Had he that deep-seated recondite complaint, and did any doctor find it out? Patience. In the meantime, the shadow of the Marshalsea wall was a real darkening influence, and could be seen on the Dorrit Family at any stage of the sun's course.

(*Little Dorrit* 250)

ディケンズはここで、「マードル氏の不調」が社会と関係することの可能性を暗示しつつも、読者に「忍耐」を要求している。したがって、「マードルの不調」は、作中人物たちばかりでなく、我々読者にとっても「謎」である。

「マードル氏の不調」に正面切って言及し、態度変更を迫るのは、ただマードル夫人のみである (第1巻第33章「マードル夫人の不満」)。すなわち、マードル氏の「謎」は、個人の病気あるいは家庭の小言の対象という形で描かれるにとどまる。たとえ、医者をはじめ何人が「マードル氏の不調」に気づいていたとしても、それを仕事ゆえのストレスに帰していたのであって、不正の隠蔽あるいは良心の呵責などと解釈する者は、マードル氏が自殺をとげるまで、なかったのである。

マードル氏のビジネスについても、“[. . .] nobody knew with the least precision what Mr. Merdle's business was, except that it was to coin money” (382) と言われている。

るように、その詳細は、まさに「謎」なのである。それは、作中人物たちにとって謎であるばかりでなく、読者にとってもそうである。その点でメルモット氏の描き方と対比的であることについて、スティーブン・ウォール (Stephen Wall) はペンギン・クラシックス版『リトル・ドリット』の序文の中で、“Despite Merdle's real-life analogues, Dickens supplies no details about either his swindles or his speculations, as Trollope was to do in the comparable case of Melmotte in *The Way We Live Now* (1875); his riches are essentially magical, and vanish as suddenly as bags of gold in a fairy tale” (xviii) と言っている。マードル氏の死という結末によっても完全には消滅しない「謎」はこれにとどまらない。例えば、我々読者は、マードル氏がそもそもどこから来たのか、その出自について、メルモット氏の場合のように「噂」という形ですら、情報を与えられることはないのである。

3 反復と反転

メルモット氏とマードル氏は、巨大な投資にからむ詐欺師として同類でありながら、一方は最初から「噂」の対象であったのに対して、もう一方は、よい評判の陰で「謎」に包まれていた。トロロブがメルモット氏を構想した際にどれだけディケンズのマードル氏を意識したかはにわかに決着のつかない問題だが、時間的にこの2つの人物像を並べてみれば、トロロブのメルモット氏が、ディケンズのマードル氏という巨大な投資にからむ詐欺師像を「反復」した上で、最初からその正体を明らかにしておくという「反転」を加えたものと見ることができるだろう。

この2つの人物像の関係に思いをめぐらしながら、仮に、「反復と反転」という言葉を発してみると、それで意外に多くのことを言い表すことができるように思われる。

その一つとして、家族構成という何気ない細部を考えて見よう。メルモット家の構成は、夫婦に子どもが1人の3大家族という点ばかりでなく、子どもは現在の夫婦間の子どもではなくどちらかの連れ子であるという点でも、先行作品のマードル家のそれをいわば「反復」しているが、家族間の関係は見事なまでに「反転」している。すなわち、マードル家の子どもは息子であるのに対して、メルモット家は娘であり、それぞれの子どもの実の親は、マードル家が母親の方であるのに対して、メルモット家は父親の方である (*The Way* 91)。

次に、二人が英国社会内でどこまで受け入れられたかの指標となる国会議員の地位を見てみよう。マードル氏は作品の中で「すでに」国会議員である (*Little Dorrit* 244, 537)。このことは、メルモット氏が、物語の最終段階で、破産の噂にもかかわらず、厳しい選挙戦を運良く勝ち抜いて国会議員になると比較すれ

ば、特筆すべきことであろう。作品の時間の中で、国会議員の地位は、一方にとってはすでに既得のものであり、他方にとっては、最後に目指すべき頂点である。

このことが意味するのは、トロロブは、メルモット氏のロンドンでの上昇と下降を詳しく描いているのに対して、ディケンズは、マードル氏をそのような変化・発展の形では描かなかったということである。例えば、トロロブは、“[.] Mr. Melmotte of the present hour was a very different man from that Mr. Melmotte who was introduced to the reader in the early chapters of this chronicle” (*The Way* 272)と言ったり、“[.] there had grown upon the man during the last few months an arrogance, a self-confidence inspired in him by the worship of other men, which clouded his intellect, and robbed him of much of that power of calculation which undoubtedly he naturally possessed” (404) と言って、メルモット氏の変化を読者に告げる。それと比較すれば、マードル氏の生活は、奇妙なまでの静謐さを帯びていると言えるのではないだろうか。

そもそもマードル氏は、目立たない風采の人であり、“He did not shine in company; he had not very much to say for himself; he was a reserved man, with a broad, overhanging, watchful head, that particular kind of dull red colour in his cheeks which is rather stale than fresh, and somehow uneasy expression about his coat-cuffs, as if they were in his confidence, and had reasons for being anxious to hide his hands” (*Little Dorrit* 244) というような描写がなされる。それに対して、メルモット氏の外見は次のように描かれる。

Melmotte himself was a large man, with bushy whiskers and rough thick hair, with heavy eyebrows, and a wonderful look of power about his mouth and chin. This was so strong as to redeem his face from vulgarity; but the countenance and appearance of the man were on the whole unpleasant, and, I may say, untrustworthy. He looked as though he were purse-proud and a bully. (*The Way* 31)

マードル氏が「遠慮がちな人」であるのに対してメルモット氏は「威張り散らす人」である。

また、マードル氏は、時に、部屋部屋をさまよひ、足下のカーペットを見つめて、“as if they were gloomy depths, in unison with his oppressed soul” という様子で、不思議な孤独感を漂わせる (*Little Dorrit* 449)。うつむくマードル氏と対比的に、メルモット氏は夜空を仰ぎながら自らの行く末を瞑想する。

[.] He had not far to go, round through Berkeley Square into Bruton Street, but he stood for a few moments looking up at the bright stars. If he could be there, in one of those unknown distant worlds, with all his

present intellect and none of his present burdens, he would, he thought, do better than he had done here on earth. If he could even now put himself down nameless, fameless, and without possessions in some distant corner of the world, he could, he thought, do better. But he was Augustus Melmotte, and he must bear his burdens, whatever they were, to the end. (*The Way* 479-80)

二人の特徴的な視線の方向の対極性ばかりでなく、この場面のメルモット氏に見られる程度の内面描写すらもディケンズはマードル氏について行わない。それはおそらく意図的なものであって、ほとんど禁欲的と言ってもよいほどの徹底ぶりである。

さらに、諸国を遍歴した後にロンドンに来たメルモット氏の「国際性」と比較した場合に興味深い細部として、マードル氏は、おそらく国際的なマーケットと関わっているのであろうが、彼自身は外国と縁が薄いことがあげられる。それというのも、今は外国に住むドリット氏がマードル夫人に“probability of Mr. Merdle’s coming abroad” について尋ねたとき、マードル夫人は、“He has not been able to get abroad for years” と答えているからである (*Little Dorrit* 493)。メルモット氏の胡散臭い「国際性」がロジャー・カーベリーに代表される土着的「英国性」と葛藤を起こしているのに引き替えて、マードル氏は、土着的英国性とも国際性とも無縁な抽象的な存在に設定されていると言えようか。

ところで、『我々の現在の生き方』の道徳の中心であるロジャー・カーベリーについてトロロブは次のように書いている。“He was a gentleman — and would have felt himself disgraced to enter the house of such a one as Augustus Melmotte.” (*The Way* 61) すなわち、メルモット氏はgentlemanでないのである。マードル氏はどうか。現在の妻との結婚が“some fifteen years before” (*Little Dorrit* 244)とあること位しかマードル氏の前歴・出自はわからず、また、噂すらもない。ということは、少なくとも作中人物たちにとっては興味関心の対象ではなかったということになる。それほど信用されていたのかもしれない。もっとも、社交界に多大の貢献をしながらなじみずにいるところから判断すれば、いわゆる成り金であった可能性もあるが、例えば、『ハード・タイムズ』のパウンダービー氏のように、自らの出世を誇るわけでもなく、また、作者ディケンズもマードル氏の成り上がり者的な側面をそれほど強調しているようには思えない。ただし、執事頭が、マードル氏の突然の死に際して、“Sir, Mr. Merdle never was a gentleman, and no ungentlemanly act on Mr. Merdle’s part would surprise me” (678) というように、マードル氏はいわゆる紳士ではなかったようである。

紳士であるかないかの定義の難しさは周知のことだが、メルモット氏もマードル氏も最終的には「紳士でない」という言葉で切って捨てられる存在であるこ

とは間違い。そのような共通点を持ちながらも、メルモット氏を紳士でないと喝破するのはロジャー・カーベリーであり、他方、マードル氏が紳士でないと宣言したの執事頭である。それぞれに「紳士でない」という評価を下す際のいわばスポークスマン的な人物が一方が country gentleman であり、他方は chief butler であるという階級の違いにまでも、興味深い「反転」を見ることができる。

最後に、二人の死に際について考えてみよう。スティーブン・ウォールは“Merdle’s Roman suicide in a white marble bath veined with his red blood” (xviii) に言及しているが、マードル氏は、妻の連れ子であるエドモンド・スパークラーの妻ファニーからペンナイフを借りる。そのペンナイフで頸動脈を切った場所が公衆浴場の個室の白い大理石の浴槽だったことが、スティーブン・ウォールのいわゆる「ローマ的」というわけである。

ところで、ローマ的という点では、メルモット氏のそれにも共通点がある。しかし、そのような共通点を持ちながらも、やはりそこには大きな「反転」があると言わざるを得ない。メルモット氏は、生涯の最後の日に、社会的には破滅したことを人が皆知っている状況の下で、大胆にも、下院議員として登院し、休憩時間に、周囲の冷たい視線をものともせず、議員食堂ではシャンパンを飲み、喫煙室では太い葉巻を吸い、ブランディーを飲み、議事が再開すると、審議中の法案について無知であるにもかかわらず、酩酊状態で発言を求めて立ち上がり、前のめりに倒れるという派手な振る舞いをし、その後に帰宅して、翌朝までに青酸による自殺を遂げる (*The Way* Ch.83)。このくだりで、トロロブが2度までも「トーガ」に言及している。“It was thus that Augustus Melmotte wrapped his toga around him before his death.” (316) “He might have wrapped his toga around him better perhaps had he remained at home.” (318) 言うまでもなく、「トーガ」は、元々ローマ市民のゆるやかな服のことだから、メルモット氏の国会議場での不敵な振る舞いとその直後の自死にローマ的な倍音を響かせることになる。すなわち、同じく「ローマ的」でありながら、マードル氏の場合の私的で閉ざされた空間と、メルモット氏が選んだ公的で衆人環視の舞台とは、まさに対極をなすと言えよう。

4 まとめ

ここまでの検討をまとめるに際して、『リトル・ドリット』と『我々の現在の生き方』の時間関係について触れておきたい。トロロブの『我々の現在の生き方』のある箇所に出てくる手紙には“Tuesday, 2nd July, 1873” (*The Way* 390) という日付があり、この作品の出版年とほぼ一致している。トロロブはまさに同時代を描いたのである。作中人物の1人であるピプキン夫人が、15年程前と現在とを比べ、世の中の変化の激しさについて次のように述懐している。

She [Mrs. Pipkin] had not been allowed to go to the theatre with a young man when she had been a girl, — but that had been in the earlier days of Queen Victoria, fifteen years ago, before the new dispensation had come.
(328)

ディケンズの『リトル・ドリット』(1855-57)は、「30年前、マルセイユは・・・」という言葉で始まるので、物語内部の時間は1820年代後半とみなされる。しかし、ペンギン・クラシックス版『リトル・ドリット』の注にもあるように(“Dickens’s concerns in *Little Dorrit* included those of the time in which he was writing” 844)、ディケンズは出版当時の、すなわち1855-57年の、時代状況を書き込んでいるものとすれば、それは『我々の現在の生き方』の時間よりも17、8年前となる。すなわち、トロロブのピプキン夫人が懐かしんでいた自分の娘時代とは、ディケンズが『リトル・ドリット』を発表しつつあった時代にほぼ一致するのである。この間に社会が大きく変化したであろうことは、歴史学・社会学的な資料によって跡づけるまでもなく、まさに、ピプキン夫人の述懐が教えていることになる。

このような時代の変化をも考慮して、メルモット氏とマードル氏の描かれ方を比較してみれば、次のように言えるのではないかと思う。すなわち、『リトル・ドリット』の時代は、遠慮がちで謎めいたマードル氏の詐欺に人々が不用意に騙された時代であり、また、その中で他者に献身する主人公リトル・ドリットの無私な生き方が救いとなり得た時代でもある。それとは対比的に、『我々の現在の生き方』の世界は、最初から詐欺師という噂があって、しかも、控えめどころか大胆に行動するメルモット氏の詐欺に、人々がはつきりと目を開いたままで半ば共犯的に巻き込まれていく、その意味ではおそらく『リトル・ドリット』よりも救いのない世界であると考えられる。

参考文献

- Dickens, Charles. *Little Dorrit*. Harmondsworth: Penguin, 1998.
 Glendinning, Victoria. *Trollope*. London: Hutchinson, 1992.
 Kermode, Frank. “Introduction.” The Penguin Classics edition of *The Way We Live Now*. Harmondsworth: Penguin, 1994.
 Mullen, Richard. *Anthony Trollope: A Victorian in his World*. London: Duckworth, 1990.
 Super, R. H. *The Chronicler of Barsestshire: A Life of Anthony Trollope*. Ann Arbor: U of Michigan P, 1988.
 Terry, R. C. *Anthony Trollope: The Artist in Hiding*. London: Macmillan, 1977.
 Trollope, Anthony. *The Three Clerks*. Oxford: Oxford UP, 1978.

—. *John Caldigate*. London: The Folio Society, 1995.

—. *The Way We Live Now*. Harmondsworth: Penguin, 1994.

Wall, Stephen. "Introduction." The Penguin Classics edition of *Little Dorrit*. Harmondsworth: Penguin, 1998.

荻野昌利, 齋藤九一, 天野みゆき, 木村茂雄「後輩作家から見たディケンズ」『ディケンズ・フェロウシップ日本支部会報』第22号, 1999.

齋藤九一「トロロブから見たディケンズ」『上越教育大学研究紀要』第19巻第2号, 2000.